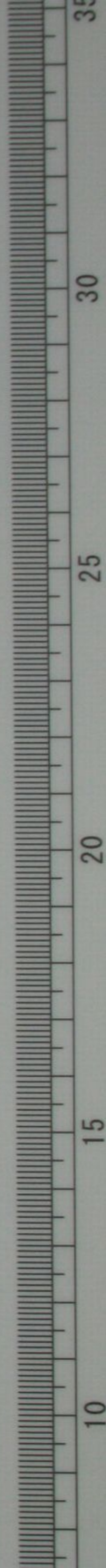


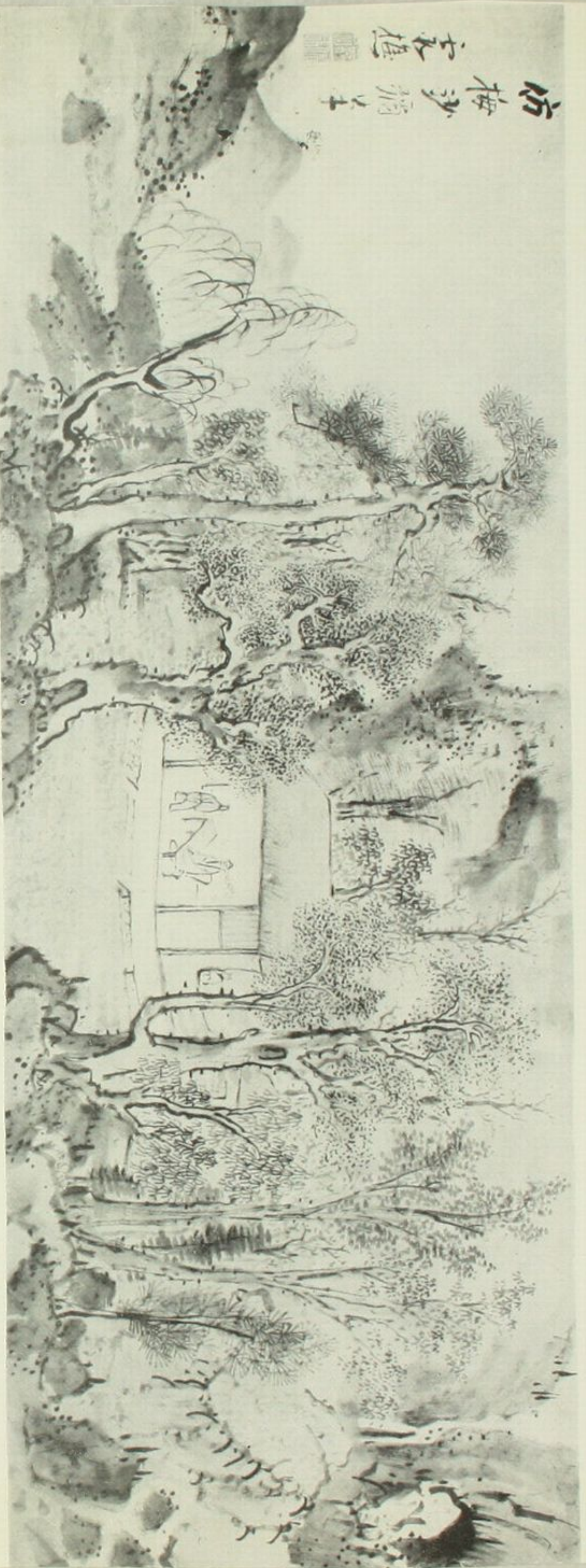
昭和十三年八月上浣起筆

戊寅坐右錄

五

特別
14
1919
495





龍梅沙翁
壬辰起筆

藏氏造 順坂小 京東 彩淡本紙 圓堂草林密 (頃歳八十三) 筆雅大池

176760

戊寅春在 昭和三十二年八月上流起筆

前巻に林統書の自圓民族性、乾七決の二三節も挿入しんが紙の巻を、他の二三節の挿入が、未だ多くたか、夏に巻の終りをあつた

心も主義に就し、支那民族の世界の頂上と望せんとす。即ちその熱心なるが併し人生の多くを味ひ人生の價値も甚と認め、而も人生の各人の運命もあつて可なり。程成ん又幸福に生かさんと主張するの心ある。何ある支那民族の苛酷な運命の下にあるかと思ふ。彼等も一七二七人が無い、又キリスト教徒の福音もあつて其の爲め生きたることもあつて、或の西洋の徳也者等が爲す如くこの地上に於てエートじやを求むることもある。彼等の欲する所ハ

に起るべきのむねが、是れに於ても并列。必其永や附属を
と爲す事ありの座があるのと同様である。有漢語族の支那
人の白人と見ても真面目な受容者である。

以上の法を、支那民族の保守主義と決つてみる。曰く支
那人の天性自尊の民族である、彼等の政治的、時と處
處を受けしむる文化的の座大なる人間主義文化の中心
にあり、漢語族の極端に孔子を誇り、孔子を誇る
ことより自ら民族を誇り、人生の道徳的真能を
理解し、支那人を誇り、又の人間性を知り、知識を
誇り、又の道徳的、政治的、文化的に於ける人生の問題
を解決ししむるを誇る。……人間、自命を真実と相
人と信じて誇る、自ら保守的とする。……支那人の未だ



のさうする、不思僞ん保守主義の傾向である。外國留學の
帰りのさうするの支那服を着る支那人の生活と若くは
うろたへて、彼ら支那の同胞と混同して、或はそれ
知是とも受容する、支那服を着る、及んば彼の魂は、
くもつた。よその歐州人とも一生流支那人留まらざる
支那的環境の不思僞ん魅力、彼ら中年の人々
は、一方支那人大衆の自覚のなさを、一種の種族的
本能のさうする思想を守つてゐる。種族的優位、如き
種とも、其生活の基本型、いつまでも存続すると思ひ
ぬ。

以上の法を法する所の要諦がある、批評的能力ある支那
人から其の種族的特徴をさぐり、その元が初め、若くは

○巨名を畫し一帖と持ち去り、亂漫を治ふ事あり、石の一面
黙苦く、人汗金白、余の題漫を待つともく、や、即ち汝
國の漫を修むも其の旨白と填ふ

此何皆其形、惟方也、豈其中有所蘊邪、將取之
所謂瑤々者歟、然則常為其常所常邪、何以藉
胸中之石、魂邪、將常對也、若有所斯心守也、
其能日漫之以五平酒邪、

○曰、莽時代或る程の罪人と治展に預けられ、其の苦しいもの
を後復讐の四十餘士と二三の病に全預けられたこと、これ元
祿の太平時代たるもの、作文曆の感あり、と云つて、世の耳目
を聳動し、預けられた治展も、特に待遇を蒙り、作文なる、
其の間の消息文、作文に存するものあり、爾來、作文回す犯人と



のにお預けをうけたもの、作文本種の例に倣ふ、持て懲罰
さうしに似たり、前次預三村の福山、作文預けんとて、作文
何れも待遇を蒙りしや、作文曲印、作文難きも、大改の末、作文
三郎ハ身家とを出し、作文と云ふも、作文聴潮、作文其の
一別巻の三、作文此、作文幕府預犯人、作文臨川六、作文花の法團、作文始末の
文書あり、作文と云ふ、作文如何も、作文取致、作文鄭重の、作文と云ふ、作文其の
要點を、作文本人の預犯人、作文様の敬称を、作文附し、作文と云ふ、作文讀本の格
に準じ、作文待遇の事、作文特に、作文新編、作文を、作文設けて、作文長所と、作文うけるこ
と、作文本人におし、作文清用、作文番頭、作文四人を、作文責任者と、作文する、作文外者、作文
十人、作文を、作文定め、作文書一夜二人の、作文誣む、作文べき、作文と云ふ、作文、作文、作文
番給仕二十三人を、作文定め、作文書一夜二人の、作文勤、作文あへし、作文と云ふ、作文、作文
師七、作文番頭、作文防主、作文七、作文毎の、作文誣め、作文と云ふ、作文、作文左の、作文條目、作文あり

人がお右の中村を巻の菓子所餅とんぱのい支那が
 八月十五夜に立いつつ習儀の昔あましあまの是年
 長崎出身の技友から月餅と題してのことなつた
 八徑一尺許の大きな餅であつたが別ニ其由來をもと
 かつん仕舞舞の記の中村を餅と添くれ由來をえら
 考へ支那の喇嘛僧が築の園に女只の死滅を因り其の
 故をを餅の中へ潜め各に配る一奉喇嘛僧と
 夜を殺し其後日葬式をもせしむる取置くよめる因
 つた物命を全殺の死をもとせしむる母の餅を掃き
 こといふ今も尚ほ此の習儀をいふも



月餅げつぺい (支那語) 乃由茶ないうぢ

支那の明の時代に、蒙古から傳來した嗽
 教がだん／＼盛んになり、その勢力を増長す
 ると共に弊害も續出し、多くの人の怨恨は極
 度に達しました。

そうするに誰から言ひ出したといふことも
 なく八月十五夜を期して一舉に喇嘛僧を驅逐
 してしまはうといふ計劃が立てられ、その機
 文を饅頭の中に秘めて配布しました。そうし
 てたうとう目的通り彼等を匿殺してしまひま
 した。僅か生き残つた喇嘛僧は辛うじて蒙古
 に逃げ去り、支那には全く喇嘛僧の跡を絶つ
 に至りました。

然し當時の冠婚葬祭は總て喇嘛僧の手に依
 つて行はれてゐたので、急に彼等が居なくな
 ると不便を感じるのみならず、信仰の據り所
 がなく、後悔の念も生じて、それ以來十五夜
 を迎へる毎に當時を回想し、月餅を作つて供
 養することになつたといふのであります。
 支那では現在も尚ほ盛んに月餅の贈答が行
 はれて居ります。

○自分の十数年前から今迄の酒海を手帳に録り漸やく積ん
数百に及ぶ文中漢詩外のもの若干あり今閑に乘じて彼河川
柳の影を左に橋載る路を歩みて意に満ちるを以て唯
此其年巧を弄せしむる會心のものは若干あり

(八月十三日)

- 一 未だ桃のグダク酒を喰ふこと
- 一 竹の酒は四の五の言ひたぬる 井月
- 一 初松魚酒は四の五の言ひたぬる 日上
- 一 樽のりや小言八万酒を杯 一茶
- 一 酒は一筋夜やロアンくと 川
- 一 未だかゝる飯もあまき 福酒を名
- 一 めもくと一平の巻をけり 夏之持



- 一 酔くや酒の油もさき 唐
- 一 酒あつとえのまもろ 花の夜
- 一 二の酒七の酒の花の夜 花の夜 燈山
- 一 酒のあつとえのまもろ 花の夜 燈山
- 一 酒家定し酒の歌の香をやく 甘村
- 一 とくくと垂るる酒のさういさ 燈山
- 一 五月内や小袖をはきと酒のし 燈山
- 一 酒のあつとえのまもろ 花の夜 燈山
- 一 馬叱る酒の酔や 燈山
- 一 八岳崩が破顔微笑や今年酒 一茶

- 一 酒を喜ぶを喜のた見を 其角
- 一 名月や長酒飲まんと奴奴う
- 一 七どろーや雛に對して不登
- 一 大木をんかゝるの餅の節うそ
- 一 夏餅や焼ここの柄杓水
- 一 足あぶる亭主人向へは酒さる
- 一 利果とさアとさあまき酒うそ
- 一 髪を焼いてぬ髪を煮火の夜酒沸し
- 一 今や肩天地と格とのみぬる
- 一 十五かゝ酒を飲め出せ今日の酒
- 一 げい酒の愁を掃ふ帚をとんてはちへい吐
く飯を



- 一 餅ぬぬも元七の笑へは唯柄とめする人もおこ
こしや
- 一 俤入の唇人の酒を有る男あつ川柳
- 一 酒衣の身を突ぬる鯨の怒り
- 一 神代もたままう二八の酒かあう
- 一 長酒をか仕らふとあじくあま
- 一 秋風や酒肆に待うたあ漁者推考甚お
- 一 酒を賣る家のあふちよとあんれ
- 一 寝酒いざ年が行のうと行ま
- 一 肌寒く行燈燭のこゝ礼酒
- 一 野老のこゝ行燈燭の一鉦子
- 一 公ろの行燈の燭飲ちあ入る

一 寒熱の甚きとめて、後酒を飲み

一 劉伯倫や亦太白酒を比まぬべし、人、更科酒飲の

月雪も酒かろけん、只のとき

一 世路は暗し、誰か我れ道とある方ぞ、只酒のみ能

く之を照くせん、然る我の泡立つ酒を飲み、以て

人生の道をやり行かん、アサクレ

一 今の我ん生きた杯を飲ん、死むのりあらずか、れく

ゆつとさうせん、何れん、我又并ひ飲まん、あ

一 我の墓中も歌ん、人よ飲め、時あるはくくして

死ん、我んの如く寒冷く、あ、さう前を飲め

日

一 あつ時、新酒、酔を悔多き、産



一 瓜七は足の一箇の食出し、謝月

○三川の若園を行きて、竹、松、梅、花、酒、茶、あ
るが、余は押草をも、寄りて来たか、たの酒、茶を、巻して
送つ比

杯、賢、真、杓、聖、典、我、萬、人、新

仰里川尻の中野の芝代に余は、松、竹、梅、の庭園、二、式、石、の、不
と集めて、山を、築いて、あつ、先、代、の、石、と、後、味、が、あつ
れと、見、る、先、代、の、物、有、今、の、主人、か、多、命、類、の、押、草、を、
清、い、ん、た、か、く、嘉、齋、の、二、字、を、書、き、て、送、つ、比、
某、和、人、近、か、し、酒、茶、を、出、放、る、ん、予、に、是、部、を、撰
ぶ、余、直、ち、ソ、ア、酒、茶、の、名、を、の、撰、ぶ、木、後、酒、茶、を、

と老くのこのまゝを、今のまゝにハ物好と云ふか、當て
大美の本を、野田大塊の俳句を俾入ると評し、此
もあつた、今の俾ハ、蘇丹品と云ふれ。

北次平の押、毫を需らざる、俳句の意ある語をと特に注ぐ
一未だ人多し、成心く陳套を避けん、聊か苦心する
所あり、終に、長儉履約の四字を得て、其を寫す。

二字款の、此概ハ陳套、予書家の為す、儉も款也、
俾、之、檢出、予二字あり曰く、梅魄!

酒家亦村文則の、添ハ、杯、酒、可、五、と云ふから、ハ、リ、空
と訓む、ハ、可、飲、可、飲、可、飲、と云ふ如く、上ハ、置、か、る、心、下、ハ、
置、か、る、心、と云ふ、以上杯や天狗杯を、白物持ち切りと
意味する、ことがあつた。



此定深の、横、字、是、字、を、需、ら、る、ま、あ、り、即、ち、身、食、を
富ハの四字を起す。

高、有、意、の、四、字、款、を、此、ハ、高、友、を、余、も、依、を、忘、む、即
ち、此、梅、を、條、と、之、と、思、ふ、べ、し。

相、識、は、情、余、を、蘇、丹、の、品、款、を、求、む、余、ハ、誤、の、二、字、を、也、
と、其、ハ、ハ、誤、蘇、丹、の、浅、田、文、伯、の、送、向、の、卷、を、ハ、ハ、誤、の、二
字、正、家、の、五、條、を、也。

危、行、杖、を、蘇、丹、の、品、是、詞、を、求、む、ま、あ、り、余、依、を、
一、高、の、詩、を、採、す、云、く。

松、頂、攬、身、羽、族、衣、理、風、百、鳥、徒、悲、誰、世、
亦、有、鴟、巢、寒、空、得、煩、君、一、攬、塵、全、

近、隣、ハ、割、意、を、求、む、ま、あ、り、酒、次、余、ハ、命、款、ハ、梅、を、毫

を求ふ、乃ち、鮮潔家跡の四字を乞ひし世ふ、
御里の學校余より希款の押毫を乞ひし、投雲尋道の
四字を乞ひし、投雲、投雲、投雲、投雲、
知人一視を乞ひし、未だ、保く、曾家刻家心平し、世にあり、
即ち、研銘を刻見し、世に、保く、銘に云く、冷雲、
予、往年名家手向の英皇、没頭し、時書亦も、世に、
と命し、杉穂の節市の為り、款面を、押毫を、予、未、
の巻軸に、種々の名を、撰み、（此、雲連、雁、魚、龍、横、）
世の一二と、ま、班、
余の、堂、印と、紅、雲、山、房と、ま、印と、紅、雲、と、ま、印と、
名と、後、所、款を、紅、雲、と、ま、真、故と、發、見し、
と、了、了、可と、一、笑、す、
碎、客、の、跡



坪内古述の、熱海の、坪、入村と、あり、
北村名も、古述の、俗と、忘む、余乃ち、
在の、款と、書す、入村、附、山、述、
と、家、の、古、述、の、長、今、古、書、の、款、を、
西村、又、則、余、の、酒、杖、を、以、て、
と、余、銘、を、撰、み、刻、す、曰、く、
内、法、花、芳、
余の、私、印、紅、雲、山、房、の、印、
作、所、と、
芝、田、加、治、川、堤、の、
毫、を、
更、又、春、堤、十、里、漲、
と、書、す、

絶句
及例也

去脚止の破亭、雅名を有するより一二過きたり、乃ち再
思懐する、岩宮に傳へ亭(屋飾傳念)有り、高田に柳橋
柳あり、唯此えんのみ、

余田里の舊酒橋、酒橋、湖心、常焼法書、雨と題す、法ハ
平凡なるも、情味を有す、

余壯歳、其酒橋、起、外も、湯身、凡、折、笑、甚、の、款、面
と書す、是、ん、ゆ、所、家、之、の、紀念、物、其、家、に、之、の、拈、毫、
影、何、れ、も、存、す、や、其、共、一、會、其、拈、毫、の、年、滯、と
偏、も、も、ん、ん、と、ナ、ハ、一、ワ、ン、也、也、

家、我、之、後、此、竹、柳、亭、の、會、所、二、三、言、額、予、所、接、所、
之、を、得、く、小、州、注、を、施、し、左、氏、云、一、會、者、信、之、始、也、と



余此の注を愛す

待合の如、將余の醉と授け起、一、柳、其、を、法、余、則
研、安、書、家、と、書、一、又、惡、縁、深、由、と、書、し、笑、つ、て、止、也、

余、其、人、葭、中、の、扁、額、を、掲、げ、け、り、故、し、書、を、乞、ひ、ん、也、
●、其人を得ず、解、く、書、を、慰、む、也、此、の、字、我、達、圍、眼、前、の、

景、也、未、未、杜、也、引、引、と、書、し、附、の、刻、意、主、持、云、と、
●、此、店、主、例、に、掲、げ、ら、る、也、

余、墨、江、の、橋、係、に、住、す、る、日、二、階、に、扁、を、枕、江、橋、と、書、し、岩、宮
の、口、畔、予、を、呼、ぶ、ん、也、イ、チ、コ、コ、一、と、以、て、一、也、が、吾、相、也、

を、以、つ、て、枕、江、と、名、つ、け、何、ゆ、也、是、其、記、を、作、り、亦、東、の、
●、なる、秋、支、峰、に、嘯、し、ん、也、其、月、影、風、の、柳、柳、也、と、云、ふ、く、

其、二、三、時、の、紀念、物、あり、今、日、世、也、

落合村に別荘を築みし時書あり最良の書なり
寒風起る言ふ、今年其書ハハ推し思ふ、
傳作ある言ふ所、所の閑松庵の扁額を得て
有、
歿、
あり、茶室を閑松庵と名く、
ハハ八歳の書也

余の父の別荘玄圃に白川居士の書を刻し、
園の松数を掲げ、此額而某侯の書あり、
而の意は儒官の遺徳あり、
故を以て余の別業の用と文の、
取し出し、後世を授け、
故に、
園

記を缺く。

余の父の別荘玄圃に白川居士の書を刻し、
園の松数を掲げ、此額而某侯の書あり、
而の意は儒官の遺徳あり、
故を以て余の別業の用と文の、
取し出し、後世を授け、
故に、
園

似後、来りての白押毫す所、美疑の家丈人の罪也。即ち
んとも、署名をすし、予の子孫誤るも、失ふ美ん。


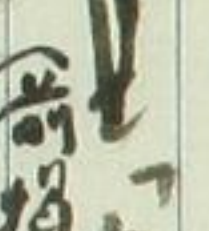

奥平長忠(通稱)の次郎平似後、いそり前原一滅と在り予
の家ニ宿す、長忠余の為りて、命額を押毫、文云く、敵愾、当
時七八歳の幼兒ニ此あり、文より、不似合らざる、似たり、然ん
とも、長忠の意氣ハ躍如なり、此額、今家ニ母無し、余の幼
名を録し、あんが御軍の何人が所持せば、讓共を欲す、前原一
滅が、余を、是つて、忠孝の義の候、悔るも、余の幼名、一
且失ひ、ゆる、中後、帰し、今家ニ在り

野口英世帰朝の日、余、後、余の在り、迎へて、饗食す、英世酒
次筆を把り、過如、不、と書、〇す、英世の意、余の氣、鋭
を戒め、これ、在り、ん、何んを、問、ん、故、山ハ、瘴、の地、今



學術のあり、狗し、けり、彼んハ、天、觀、と、余、あ、り、と、云、く、予、を、以、り、
見、ん、
合、津、ハ、一、良、寛、の、書、を、模、刻、し、し、め、し、余、ヲ、贈、り、文、云、く、

大海志、知、是、百、川、應、例、時、と、余、之、ん、と、佛、壇、所、在、の、重
ニ、掲、ぐ、別、ニ、良、寛、の、書、を、集、め、我、解、我、醒、の、二、枚
の、校、額、を、依、り、道、遠、と、余、一、分、共、す、予、我、解、の、額、を
得、て、ま、い、道、遠、ハ、我、醒、の、額、を、得、し、喜、ぶ、は、す、深、く、存
し、と、出、さ、せ、道、遠、の、福、徳、ハ、一、と、現、る、

余ハ、佛、壇、ハ、大、地、無、寸、土、の、母、額、も、掲、ぐ、中、村、蘭
台、の、女、字、の、作、也、蘭、台、の、刻、字、も、此、扁、額、ハ、佛、壇、の、小、目
也、予、ハ、食、を、以、問、部、松、堂、(閑、巻)の、二、字、額、を、掲、ぐ、文、云、く、

予ハ、食、を、以、問、部、松、堂、(閑、巻)の、二、字、額、を、掲、ぐ、文、云、く、

新妹の二字川原の中宮氏を存す一は柳園の二字高家も存す
余は年四字歎と贈ふ文の忘れたる所も備心するし唯此白勢
氏の考めとあると厥を自ら用ひると歎せたり或る人之んを
新臣の白勢(春三)に愛ひ便甚に康ろりし白勢の川原
十解を著し其名のなき故を以てしづく贈ひたりと云へり
思ふに此歎考言又あるも人の三つ目の事ありこの便ある
人世人多く考書も歎すのみ考ある事也

家初、象山并、山陽の遺文あり、象山は、徳海公の世も提
言仲氏あり、序跋を作り、山陽は、蘇氏印略の和刻に
序するもの共、二類あり、其の類あり、細考あるに、序あり
通て、予、煤氣の侵すを恐る、象山の改題、と、巻物と
可、山陽の、未だ改題せざんを、頼波、題、題、題の、若く



納めあり、蘇氏印略の序、和刻に終る用ひりて、り、七、真
跋、と、山陽の遺文あり、と、跋あり、

○平次淑郎が父如坂に、晩年、肥後立口を志す、今
回、三、回、目、も、終、り、起、れ、り、年、七、十、五、定、才、の、平、次、駿、一
印、男、丹、丹、あり、其、に、在、る、院、儀、長、き、り、波、郎、才、の、新、
考、の、自、ら、思、え、と、ま、れ、法、字、傳、生、の、日、よ、り、改、題、考、あり、
新、を、新、考、と、ま、い、漢、山、生、身、を、注、活、考、攻、と、詩、を、
と、送、活、考、あり、新、才、あり、漢、況、を、と、ま、り、久、し、く、大、改、の、市、
刻、に、関、係、し、早、大、に、投、り、し、る、高、科、に、力、を、致、し、
現、に、高、科、部、を、自、身、を、終、つ、た、理、事、の、職、を、受、つ、た、り、也、
久、し、い、と、い、は、れ、り、大、改、を、存、し、頃、の、高、科、部、に、入、り、
活、立、と、存、れ、り、或、人、と、酒、を、嗜、し、胸、の、通、り、也、と、い、く

日記の多くは「節」を以てし、温籍の叙のまゝ人
にあり。早大の啓動時代、早中の校舎から早大の呂
夫を一時攝したこともあつた。友人のボツク「忠」籍に入る
の「淋しい極み」である。(八月十五日、舞儀の前日記)

の手、工藤家の為り、奪天工の扁額を書き、
と二面あり、實に此の三字に値する。其れ稀なる。母
が誇つて社長を「印刷会社」の「中村工藤」の「病」も
印刷機械を作らうと、中村工藤と作る。枝、
譲り、而して日本向きの作るの「特許」を有、余の
心飛する所、（余の）奪天工の公決して、（特許）を有、余の
一項、（余の）記事の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
支那に天姥山と名の山がある。名匠は、若しから文人、（余の）奪天工の



が、多分天姥と名、名が人の気味をそいつてゐるのれと、自分もよく
てゐる。日本も「夫」の子と名のついた地名の一、二ある。自分も「夫」
を知つたの、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
近で、中村進平博士も此地に別荘を有してゐる。性年、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
「夫」を「淋しい」とかある。其れ地名を「奪天工」の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
「夫」の別荘の名を「僕」に構へる。天姥山と云ふのは、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
天姥の二字は、此の地名を美化して、地上の文字である。此れと
らふれ、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
遷移の念もある。十数年の後、自分の郷里の「藤部」
岩船部、の「藤部」笹川流の或る地、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
て、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の
め、（余の）奪天工の「前」の「奪天工」の「公決」して、（特許）を有、余の

百方勸む余云く口ハ七書くもハ喉とんと校及此書言
と川村の報或川村次自より訪ひ来つて曰く先生の奇振の言葉
の氣味は喰つたから一生の業を揮ひます但此画題は一任せよ
と、早大もカンバス并に絵の具代を貯くも余は早大
思ふらくは後果して何を履ちやあやと心に切らぬ危あ、而して
期に急り搬入するを見ん、真に襟心も丹四歌の表う代を
意はしとくもあや思物奉謝の意を寓す、これ地獄の
未歴とも、尚ほ此意画を替りて款縁、乳を聊う云
ふべきことある、中校ありて大政に清西の目、北渡り
に岩下清南を訪ひ、岩下の橋上、政治家三傑の大書
意を置く、曰く大隈曰く井上曰く松方岩下大隈の係
を指し、此係早大に献る、早大之をも受く、や否、余



云くもえび多くと、文ハ有る、文姓の芳柳の書する所
にて余の志に満ち、余の喜意早う金柱の款縁を在
り、此の字の終を多し、款縁は遂に清雄の意を飾
る、曰くよとらふ、カンバスもあや、の款縁の寸法は
もあや、いさう、左は、直ち、湖の合はたり、余は
此画此像共に叫ばる、是れ料金を出さ、ハ幾千
円とらんと、川村を早大の寄附者名簿に、
○列す、とい余の志、何く主張する所也 (同日)
早大の新田公館玄関の真正面、巨大なる圓窓の畫
あり、觀山大親の合作と、支田窓、全白の只、
法會觀山大親の二人を伴ひ、來り、画の志、近を問ふ、
人決せず、遂に食卓、就き、雜談中、余曰く、圓窓は

くしむ碑も刻見ことを期して成る余も其末由の煙
滅す所見ことを慮り十年前以乃の苑會に芝の
の園池を書し七之んを園亭に掲ぐ其時園主七
先師七既に白玉橋介のひとまうを在り其園池書し
終つて潜然たりし北國継志園とらふ園池を刻し
之碑園中より天朝山と稱するの堂つて政二勝
の置かんかか **書** 也(可上)

西京の毛^毛流^流家八十五及び其技^技兼へる川人記念館に
か^かと^とあ^あの^の余^余、蓋^蓋柱^柱之^之性^性先^先而^而念^念疎^疎と書す今都下
亦^亦一^一歌^歌の^の子^子在^在未^未熟^熟せず余^余、書^書を^を治^治ふ^ふ予^予白^白樂^樂天^天の
句^句を^を書^書し^しと^と思^思ふ^ふ云^云く^く古^古人^人唱^唱歌^歌兼^兼唱^唱今^今人^人唱^唱歌^歌只^只唱^唱
辭^辭と^と以^以て^て識^識と^とる^る也^也 可上



自^自今^今の^の酒^酒冬^冬でも^もあ^ある^る人^人の^の酒^酒の^の名^名を^を撰^撰え^えれ^れと
い^い前^前後^後唯^唯一^一回^回あ^ある^るに^に初^初の^の校^校及^及の^の體^體を^を家^家と^とあ^ある^る南^南方^方か
大^大隈^隈産^産の^の酒^酒の^の名^名を^を治^治ふ^ふは^はと^とめ^めあ^ある^る候^候、自^自分^分又^又代^代撰^撰を^を托^托
せん^{せん}れ^れ又^又保^保の^の幸^幸の^の存^存存^存と^とハ^ハる^る朕^朕と^と合^合す^すれ^れを^を南^南海^海
一^一統^統の^の名^名を^を撰^撰ん^んば^ば一^一統^統の^の音^音一^一等^等と^とあ^ある^る大^大隈^隈侯^侯
の^の大^大隈^隈と^と武^武の^の名^名と^とあ^ある^ると^とい^いふ^ふの^の侯^侯と^とい^いふ^ふと^と名^名
と^とい^いふ^ふ也^也

伊^伊賀^賀の^の者^者日^日の^の瀧^瀧と^と傳^傳は^はれ^れ時^時一^一行^行の^の山^山家^家と^と木^木十^十歌^歌の^の
此^此京^京都^都に^に宿^宿り^り十^十歌^歌の^の抄^抄葉^葉瀧^瀧と^と書^書し^しと^と予^予に^に授^授け^けり^り
と^とあ^ある^る或^或の^の友^友り^り三^三十^十文^文或^或の^の所^所本^本白^白駐^駐杖^杖と^と
と^と出^出船^船目^目に^に書^書い^いれ^れ中^中に^に春^春分^分交^交流^流山^山と^と長^長と^と
澄^澄り^りと^と為^為丈^丈形^形為^為の^の四^四時^時松^松を^を寫^寫す^すの^の古^古人^人の^の句

外へと来た盗又々限りある限りの内の人
報日殿の報復のしるしかめつら

川柳子曰く故成平も陣危位に傾け

川柳子曰く若鮎や釣らぬ柳く別れを

無人島に天子とさうい冷しから漸名

池あり夜よく月にかよへも心さげんか
す、追めの園の浄庵の慧

上手のてらことい後と見えのぬけとこと
如何んもくともあ年より奔望といふ
自覚の女か唯一の心の良薬ホん

やは肌のおろき血汐に觸るせび淋
く人日の子



教也者長苦而救又失者也 礼記

日本の狭いが深いことを忘んてん

十九世日記の書えの婦人のあつとひかる
ひある

無垢と凡の完全の可憐な性を持つて
九七未だうらんとしる、世界のどん

北つらう 入ルキ

極を有りぬれ、か七日の時を大さる
惑の二つハ、先がせうれとまふを
ろの流るゝある

アロハガタは紙の燦々インクの毒
狂ハセ盲目化する催眠術

この想像は甚く多し。此の登山の一体の趣意は、四谷上大
切の言味もあつた。山中湖詣りもあつた。大将がキヤンプ
を訪問し、文部大臣が挨拶に出うけり。我々も年
の味も、山出地は、富士山の歴史を知る稀なり。あつた
らう。山室前の事件もあつた。彼等が八月三日、道に
往、新多の礼寺を参り、山室を、おめしあつた。刻
を記すべき也。

八月廿一日記

○大谷の自決と徳長を提議する。大谷の自決は、大谷側
の主張である。文部省の意見と明し、大谷の比喩
や派閥の別も是れから公明を缺くことある。今多
くの文部が徳長を提議し、大谷の公明を得る。大
谷側は及問を以てする。大谷の自決も派閥の別



か文部省の自決と徳長を提議する。大谷の自決は、大谷側
の主張である。文部省の意見と明し、大谷の比喩
や派閥の別も是れから公明を缺くことある。今多
くの文部が徳長を提議し、大谷の公明を得る。大
谷側は及問を以てする。大谷の自決も派閥の別

○徳長の金山の四百年の開墾を以て、今、故り多く出ぬ
と云ふ。大谷の自決と徳長を提議する。大谷の自決は、大谷側
の主張である。文部省の意見と明し、大谷の比喩
や派閥の別も是れから公明を缺くことある。今多
くの文部が徳長を提議し、大谷の公明を得る。大
谷側は及問を以てする。大谷の自決も派閥の別

長つが、版本よりうたが、その若干ある、そのの珠るん、
皆時代の古くうた、その林花村の、存本の市永浮海
池を如くも見此、四冊本、揮筆あり、刊年のこと、
が寛永後程、故うた、深海が支那であつて、
又海つるもの、故うた、深海池の、故本の、
も古うた、その、自分、稀な、故本、
あるいと、笑つてゐる。

○幸田露伴が、又方振う一編の創作小説「幻族」
と日本公論の九月号に掲載し、その、
又うた、釣の、故うた、おの、
専門知識を、
出来るとの、



と獲りしと釣竿を得たことが書かれています。其釣竿は、
極上栗のとも、
こそ、
やえ、
の竿を、
儀、
れと、
竿を、
ホ、
の、
い、
の、

てあるけれども、恐らく是も自身の言の歴を流つたといふであらう(文章の運びの事)

○横岐の竹林上人と云はんは名僧であつた。晩年三等堂と云ふ草庵と徒人が居り、肉園の竹を植ゑるを樂んが、竹林上人と名を有する所此である。ある時愛竹をみかから皆枯つて仕立つた。いづれのことかと、高僧の傳ある山の庵庭が鼻觸ると、上人云ふ寸善は人魔と云ふことがある。この竹一本ふんと云つてくる量に、何れするかと問へば釣棹にするかと尋へ、正なる人がとあるのでと人びと指すにすると云ふやんが殺生することゝなる。いや、然るもあ惜しむることゝして因り果てて、こゝろいれわかれがこゝろすんば誰れも甘んじて来らるゝ



ていふと又よくれたん

北上人の良きある所かあつて左の如き逸話もある

○上人が村を行かれると、村の童等は「竹林さん馬になれなれ」とはやし立てるので、上人は四つ這になり、馬の眞似をして戯れて共に遊んだ。高松の城下はづれを、志度へ歸るべく歩いてゐられると、生き佛と云はれた、上人を試きうと、町の若者が二人、つれ違ひざまに、矢庭に、上人をなぐりつけた丈の高い上人も、流石にとつとばかりに打ち倒れてしばし立ち上らなかつた。なぐつた若者も心配になつて来てそろ／＼近寄つて、上人の顔をのぞき込むと、上人は一心に光明眞言を唱へてゐられた。不審に思ひ、罪を謝すと共に、そのわけをたづねると、この世では、人様になぐられるやうなことをした覚えはないが、前世では何か、そうしたことをしたのか、今その報ひを受けたが、晴れ／＼としてうれしくて仕方が無い。と言はれた。若者等は愧ぢて立ち去つたと云ふことである。

北僧入形之偶ぬきも佛具を従き法を説く時よく必くす土偶を玉糸しり、土偶を壁を喻り藉り巧み選りぬきと云ふ日上人竟政の年叙しか、時よく月の人びと文を入用すのあつたこと、そのまゝむらゝ木工屋あつて飯流を

らむ

「馬丁が馬から降りて走り去る。馬のついでに走り去る。

人間七情をすまざる世間を捨てる事こそが去来

まゝに成す所の骨に二三尺だけ先人する所

あり

と、えんは苦勞人むけに言ひるる各言地、自分もある時あれ。

今の世の中は偉い人といふく、やうな事もあること、あまの空も

ひかる。とまの偉い人といふ地、す像が甚れ低いといふ。

何れ一すゝさくむちんか、直ぐは地す像と抜き、其の長

所如化と異なること、今日もつく、えんを人が偉いといふので

ある。係し、こゝに注意を要する所の地す像と抜き。

ことが終りあると、常人の律さか分る事、あまの事、こゝ



はかり抜くこと、所堅れと、まの神作氏の言、と

いふ得る事、あまの世、あまの道、皮肉、その捷徑の

こと、

の山氏の先ぬ式、編んたいつせ、すゝこと、それが、あゝ大

規模の、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、あまの世、

ハカ雨、ふん十確かぬ混焼を記すの一法である。兎角習
慣のよろしく校け乾いかに僅き一時分を免す人が殆ど
式場び下草かよふかひくしまふ七、あなう構ひす美九代
七の焚香を伝送すことき慣習の痕をすんきかある。

(第三種郵便物認可)

捧ぐ

アフリカの恩人

記念碑に救主を偲ぶ

日本醫學界の眞面目と醫學者の誇りが遠く西アフリカのゴールド・コースト(英領植民地)に永く世界の自然科学者の尊敬の的となつて不滅の金字塔として残るといふ明かなニュースが廿九日午後クレイギー駐日英國大使からわが外務省にもたらされた西アフリカ・ゴールド・コースト地方は、アフリカの恐怖/とまでいはれた黄熱病の本場であるが、これを一掃するため英國はアックラに熱病研究所を設立し、所長ヤング博士と共に熱病の発見と治療に献身的な活躍をつづけたわが野口英世博士もいつしか自ら黄熱病に感染、ヤング博士と共に遂に昭和三年五月五十二歳で異境に散つたのである。しかし野口博士の研究の結果はその後幾百の黄熱病の犠牲者を救ひ今なほ西アフリカにおいては「我等の救ひ主」と追慕されてゐるが博士逝いて十年今回その感謝の念が見事に貫つ

て、このほどアックラ町の熱病研究所構内に野口、ヤング両博士の功績を永遠に傳へる巨大な大理石の記念碑が建設され英國政府代表サー・アーノルド・ホドソンが列席の下に盛大な除幕式が舉行された。ホドソン氏はその式場において

「野口博士こそ人類がこぞつて感激すべき人類幸福の建設者であつた。人類の幸福のため偉い犠牲となつて身は西アフリカの一隅に亡ぶるとも、その名と功績は世界のある限り不滅である。日本が生んだ偉人を永く記憶し感謝の念を捧げるため今この碑を博士の靈に獻げる」と

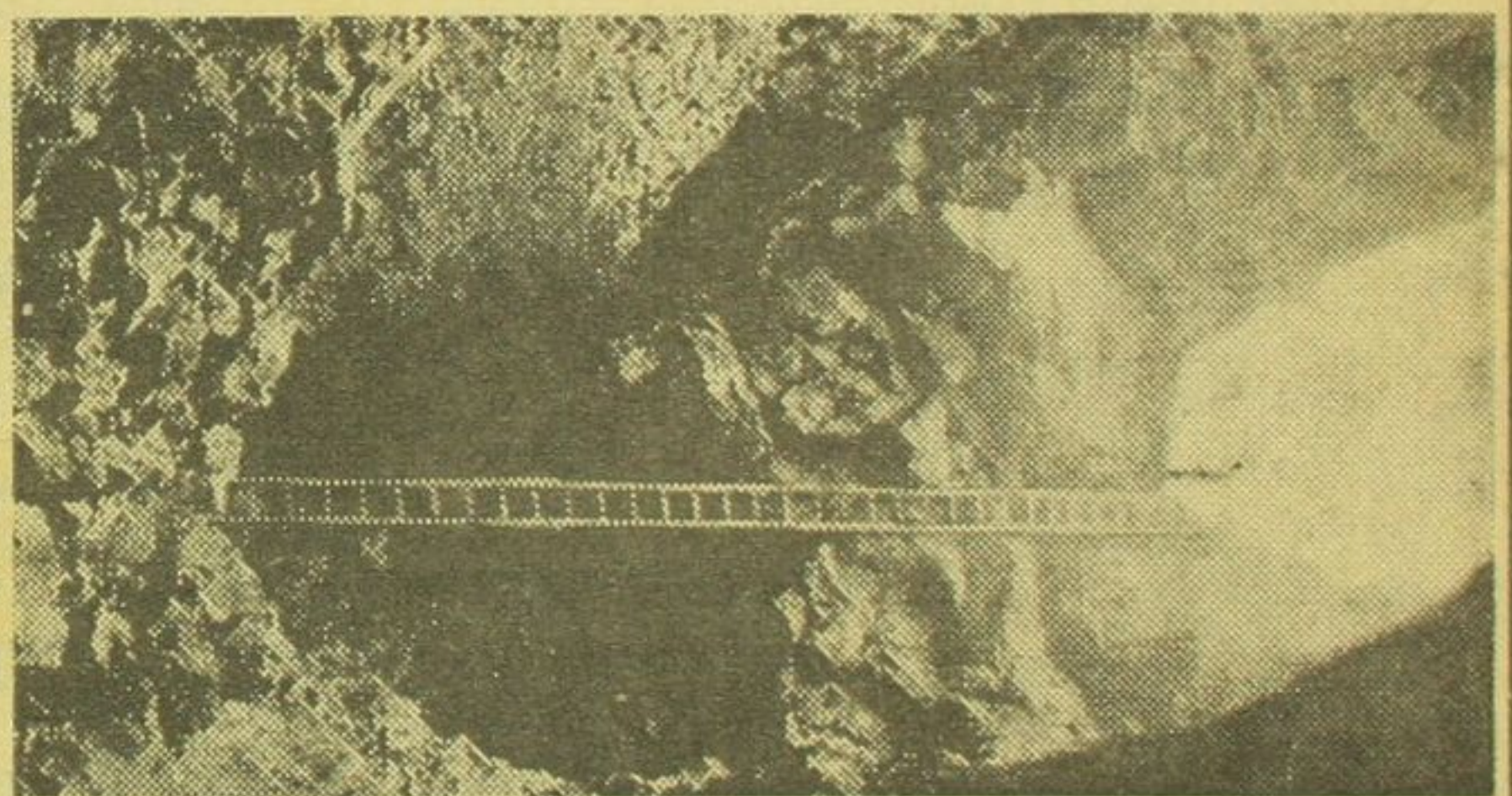
同時に野口博士が死の直前まで一歩も離れなかつた研究室には眞鍮製の記念盤が備へられわが醫學の眞精神は生ける事實として世界の醫學界に呼びかけることになつた。この快報に接した外務省ではクレイギー大使を通じて英國政府の好意を感謝した。



故野口博士功績傳を記念碑

今に又佐渡の金山 草鞋の底に金

増産計畫に意氣昂る



佐 渡 道 遊 山 嶮

金の増産は戦時下の我が國の生命線であるといふので、閣上者は増産計畫の下に強靱な増産の意氣を鼓舞をかけてゐるが、三年度の探査結果によつて日本一鑛山となる土佐金山であるが、かくて「草鞋の底に金」といふことが、四百萬分の八の金産量があることになり、探査結果をもつては、早稲田に匹敵するといふことが、最近日本鑛業調査會、六位に落ち、日本一に輝くのだ。

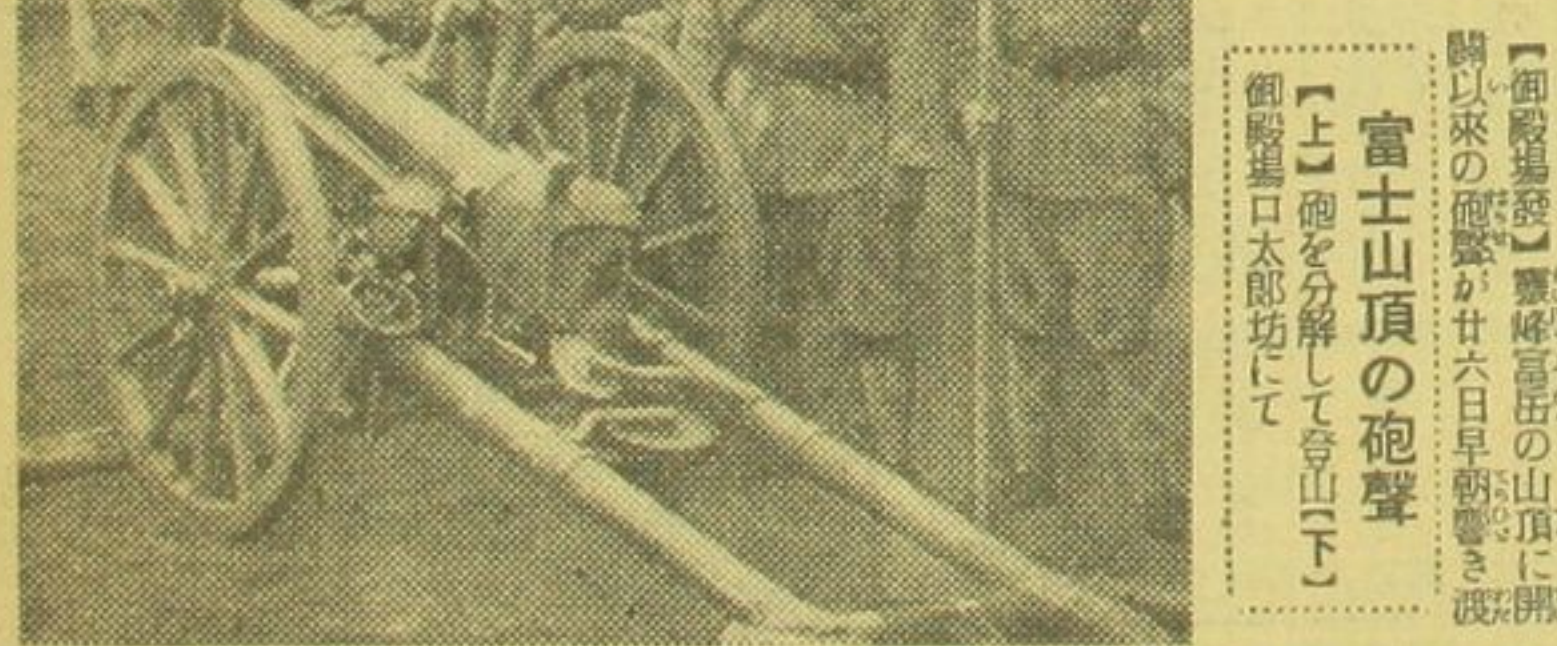
鑛山の増産は、戦時下の我が國の生命線であるといふので、閣上者は増産計畫の下に強靱な増産の意氣を鼓舞をかけてゐるが、三年度の探査結果によつて日本一鑛山となる土佐金山であるが、かくて「草鞋の底に金」といふことが、四百萬分の八の金産量があることになり、探査結果をもつては、早稲田に匹敵するといふことが、最近日本鑛業調査會、六位に落ち、日本一に輝くのだ。

【御殿場砲】御殿場富士の山頂に開闢以來の砲隊が廿六日早朝砲撃を演習した。御殿場砲隊は、御殿場富士の山頂に開闢以來の砲隊が廿六日早朝砲撃を演習した。御殿場砲隊は、御殿場富士の山頂に開闢以來の砲隊が廿六日早朝砲撃を演習した。

【上】砲を分解して登山(下) 御殿場口太郎坊にて

富士山の頂上で 大砲を射つ

近歩 二聯隊 砲の分解登山



【御殿場砲】御殿場富士の山頂に開闢以來の砲隊が廿六日早朝砲撃を演習した。御殿場砲隊は、御殿場富士の山頂に開闢以來の砲隊が廿六日早朝砲撃を演習した。

【上】砲を分解して登山(下) 御殿場口太郎坊にて



昭和十三年八月二十六日 (金)

黄金財寶お藏拂ひ 加賀百萬石の報國



日銀に寄託レコードを作った金製品

二十三日日本銀行買戻し條件付金製品買上係へ又も黄金製品がドツと持ち込まれた、先づ加賀百萬石の前田侯爵家が代々お倉に蔵ひこまれてゐた金無垢を俵りを拂つてお國の用に。

高さ、奥行共に一尺、横一尺五寸、重さ一貫の能面の厨、これは十一代家齊將軍の息女が前田家十三代の祖齊泰に嫁するときを持参したと云ふ白く付き、又三代將軍家光が幼時使つてゐた聖曆形金無垢香木入れ、三つ重ね細金皿三つ組、骨董的價値一故二千圓を下らぬ天正大判を始

め慶長、享保等々の各大判約百枚等の外、目貫四十個、刀劔の鑿數個等

何れも美術的に巧緻を極め、好事家の垂涎するに堪へる様な代物ばかり、重量にして全部で約五百だ

が得置的價値を考慮に入れると何十萬圓になるか見當り着かず保官も頭をひねらせたのを始め某侯爵家から印子金數十個重さ約十貫、某侯爵家から重量約一貫足の果物盛器、細金の鑲嵌等々目を眩ます金製品の數々に受附開始以來のレコードを作り保官を驚かせた

國寶

『當麻曼荼羅』異變

中將姫の哀話を織り込む謎 赤外線寫眞に淨土變相圖

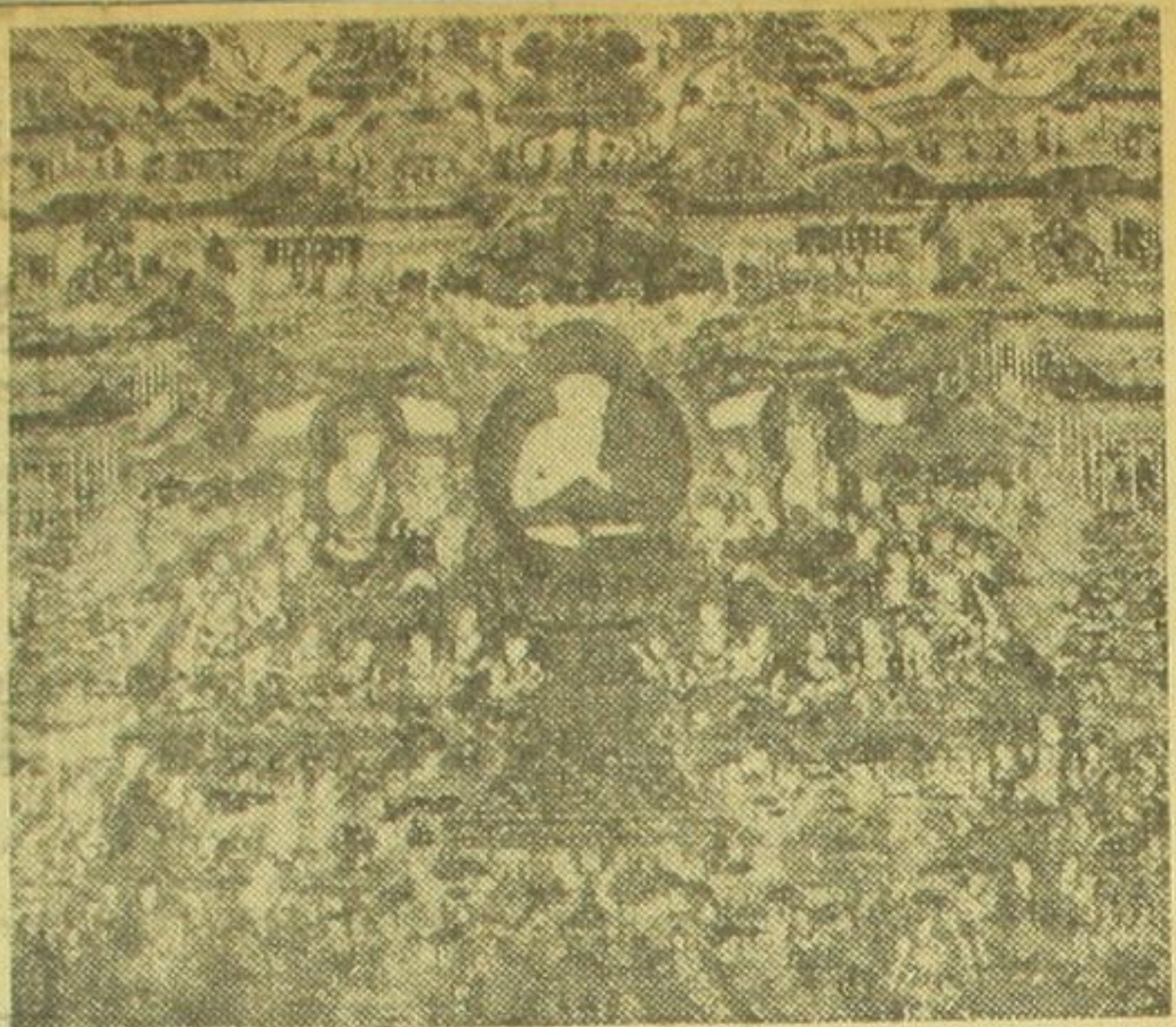


博士 伊和 大者 見發

【富田】中將姫の遺話を織込んだ天平時代の至寶、運で織つたといはれる大和當麻寺の本尊國寶一殿に『當麻曼荼羅』といはれる當麻曼荼羅が隠れか繪畫が相對立する兩説は多年學界の宿題となつてゐたが最近東大農学部植物學教授、伊和の研究者大登一風理學博士が科學的研究によ

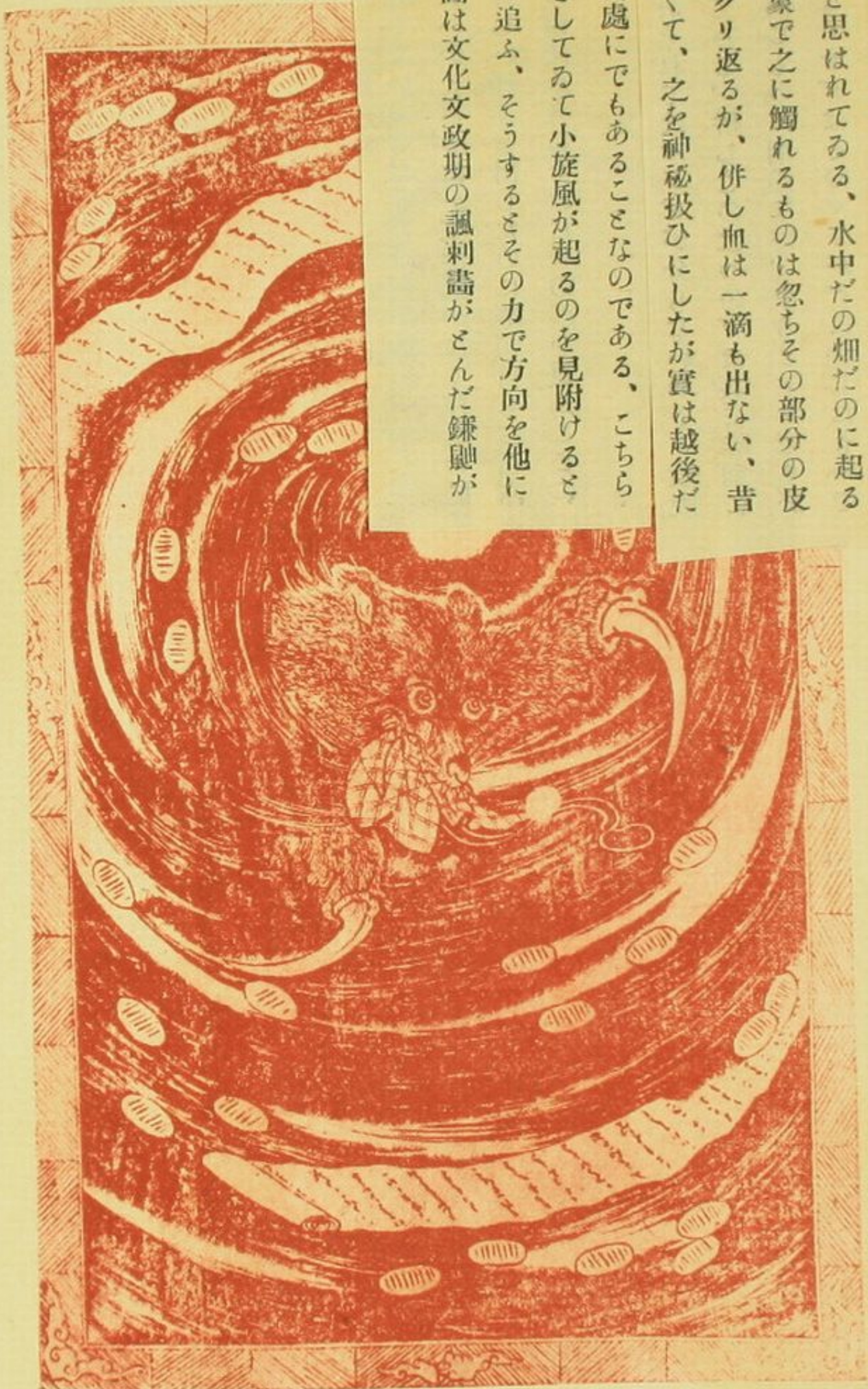
つて刻糸織、あるひはゴブラン織と同種の織物と論斷、引續き研究、このはと曼荼羅の一部を赤外線寫眞で撮影してみたところ畫面にはこれまで肉眼で見られなかつた淨土變相圖尊像の部分をはじめ諸所に思ひもよらぬ佛の顔や姿がはつきりと浮ひ出て思ひもよらぬ驚異的發見をなし、直ちに學界の權威者第一博士に報告するとともに詳細な研究を進めて

ある、松村當麻寺住職はこの發見を非常に喜んでゐる



中將姫傳説の當麻曼荼羅の一部

口繪のカマイタチの方は樞太月とも説明されてゐるが鏝蝨といふ怪獸の所爲だと思はれてゐる、水中だの畑だのに起る小旋風に伴ふ真空現象で之に觸れるものは忽ちその部分の皮膚が破れて肉がハチクリ返るが、併し血は一滴も出ない、昔はその理由が分らなくて、之を神祕扱ひにしたが實は越後だににあるのではなく何處にでもあることなのである、こちらでは豆畑などで仕事をしてゐて小旋風が起るのを見附けるとホーホーと聲を揃へて追ふ、そうするとその力で方向を他に轉するのである、本圖は文化文政期の諷刺畫がとんだ鏝蝨が諷刺してある。



古圖鏝蝨

順節 (明治初年まで下も船々頭の唄ふたもの)
 お前百まで私や九十九まで、俱に鐵寄る瀬波の濱よ、堅い約束船濱よ、梅か櫻か桃崎濱よ、濱の鹽屋に渡りがなくば、一夜通ひも私や樂にする、人の色香を荒井濱なれば、私とお前は中村濱よ、咲いてからまる藤塚濱よ、網代、龜塚、次第濱なれば、一に乗出す島見の濱よ、(此處へ來ると帆足を加減して、新潟へと船を向ける) 大鯛小鯛や太夫濱(鯛の魚獲あるところ)なれば、松ヶ崎とは誰が名を付けた、松は徳若壽命が長い(新ら唄つて來るうちに、新潟の燈台が見えてくると、又たも唄ふのが) 沖にチラリと白帆が見ゆる、だしは十の字帆印見れば、兩方揃ふた膳柱、名は延壽丸、順風よければ空晴天で、帆足揃へて正面の風で、あれに見ゆるは新潟の港、早く行きたや新潟の港、新潟港をほめるぢやないが、雨の降る夜も風の吹く夜も、出船千艘入船千艘、一つ日和山人花咲かず、沖をながめて遊山をなさる、二つは俄かにチヨロ(小舟)をおろし、三つ港へ入船なさる、四つ四綱碇をどめて、五つ入船、酒數さんと貰つた、六つ睡ましく友船よんで、七つ馴染の女郎衆あげて、八つ矢鱈に太鼓や三味で、九つ小宿を賑やかにする、十に間屋は御繁昌で暮しますがヤンレー(浦野左右太記)

盆唄のはやし

アリヤサ、あの子にこの子、團子に黄粉、よつても付かない
 アリヤサ、アリヤサにスツトサ、スツトサの化物、晩に出て化やかせ
 ヨイ、竹の切口しこたんだんと、浪々たつぷり溜りし水は、清ます濁らす出す引かす
 ヨイ、ヨイヤサ、茄子焼めが、嫁に行くこて簞笥、長持、鏡台、針箱、春慶塗の便器まで買ふて貰うて、臍が出臍でヤレ嫌はれた
 ヨイ、娘十六、七や嫁入盛り、簞笥、長持、重箱、手箱、これ程持して遣るからにや、必らず戻るな

よ、お母さん、そりや無理だ、西が曇れば雨となり、東が曇れば風となる、千石積んだる船でさへ、嵐變れば出て戻るか、橋の欄干に片足突つかけて、青涕くつ垂らして、願げた突つ外して、涎垂らして川下見れば、オワラ河原柳の影許り、アリヤサ、
 (盆唄のダシは、今は「ホワイ」と云ふ實に品がない)
 樽叩きの拍子は
 トントンカラ、トンカラカラ、トントンカラ、トンカラカラ、カンカラカンノカン
 (樽叩きを、新潟特有のもの、如く思ふは誤りにて、長岡より來れるもの、古き本に記しあり、尙ほ樽叩きを「樽砧」と云ふは、紅葉山人が俳句の題にせしよりなり) (浦野左右太)

盆唄の節は、お前百まで私や九十九まで、俱に皺寄る瀬波の濱よ、堅い約束船濱よ、梅か櫻か桃崎濱よ、濱の鹽屋に渡りがなくば、一夜通ひも私や樂にする、人の色香を荒井濱なれば、私とお前は中村濱よ、咲いてからまる藤塚濱よ、網代、亀塚、次第濱なれば、一に乘出す島見の濱よ、(此處へ來ると帆足を加減して、新潟へと船を向ける) 大鯛小鯛や大夫濱(鯛の漁獲あるところ)なれば、松ヶ崎とは誰が名を付けた、松は徳若壽命が長い(斯う唄つて來るうちに、新潟の燈台が見えてくると、又たも唄ふのが) 沖にチラリと白帆が見ゆる、だしは十の字帆印見れば、兩方揃ふた一膳柱、名は延壽丸、順風よければ空晴天で、帆足揃へて正面の風で、あれに見ゆるは新潟の港、早く行きたや新潟の港、新潟港をほめるぢやないが、雨の降る夜も風の吹く夜も、出船千艘入船千艘、一つ日相山人花咲かす、沖をながめて遊山をなさる、二つは俄かにチヨロ(小舟)をおろし、三つ港へ入船なさる、四つ四綱碇をどめて、五つ入船、酒數さんと貰つた、六つ睦ましく友船よんで、七つ馴染の女郎衆あげて、八つ矢鱈に太鼓や三味で、九つ小宿を賑やかにする、十に問屋は御繁昌で暮しますがヤンレー(浦野左右太記)



古圖鎌船

盆唄のはやし

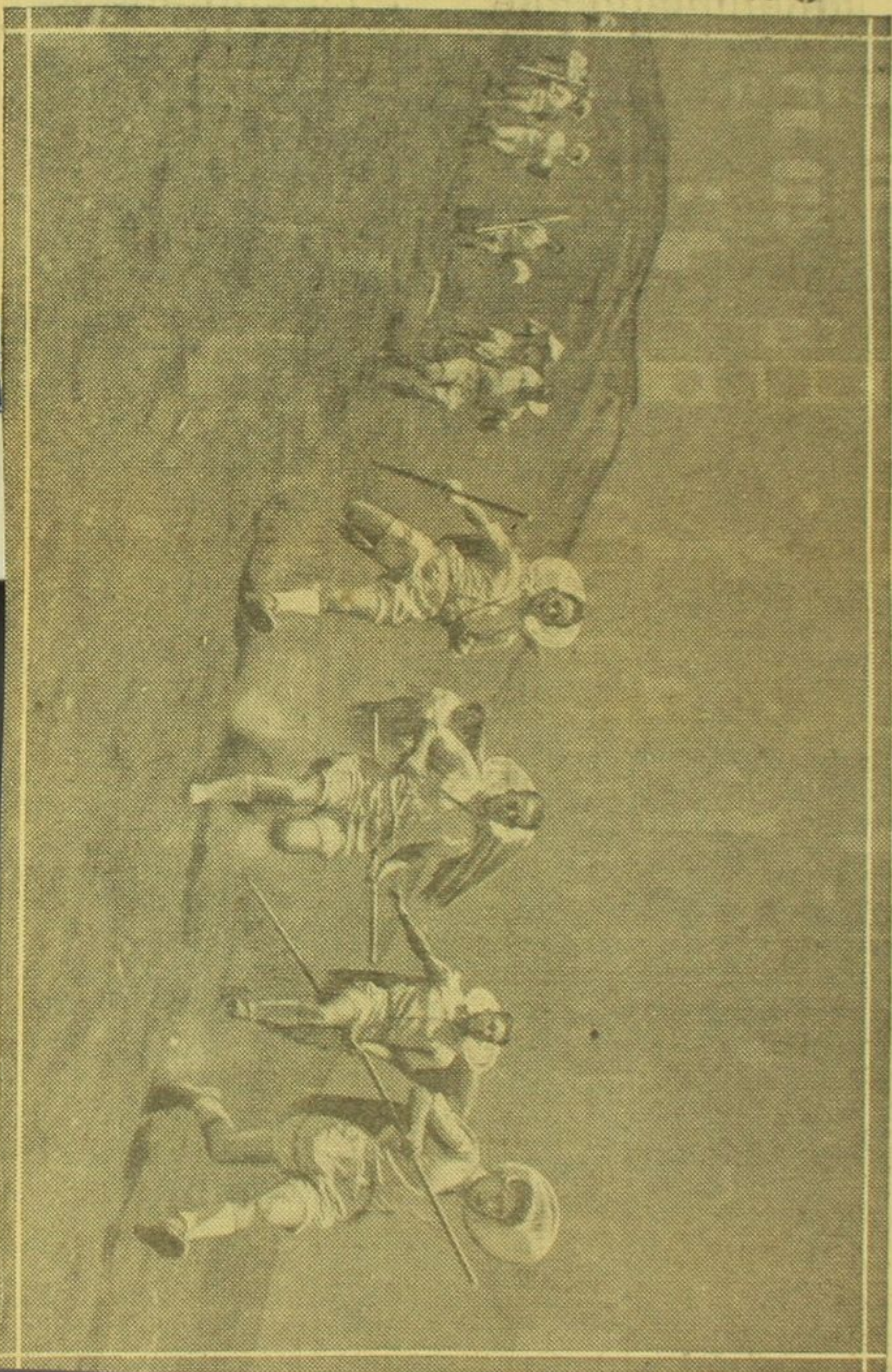
お前百まで私や九十九まで、俱に皺寄る瀬波の濱よ、堅い約束船濱よ、梅か櫻か桃崎濱よ、濱の鹽屋に渡りがなくば、一夜通ひも私や樂にする、人の色香を荒井濱なれば、私とお前は中村濱よ、咲いてからまる藤塚濱よ、網代、亀塚、次第濱なれば、一に乘出す島見の濱よ、(此處へ來ると帆足を加減して、新潟へと船を向ける) 大鯛小鯛や大夫濱(鯛の漁獲あるところ)なれば、松ヶ崎とは誰が名を付けた、松は徳若壽命が長い(斯う唄つて來るうちに、新潟の燈台が見えてくると、又たも唄ふのが) 沖にチラリと白帆が見ゆる、だしは十の字帆印見れば、兩方揃ふた一膳柱、名は延壽丸、順風よければ空晴天で、帆足揃へて正面の風で、あれに見ゆるは新潟の港、早く行きたや新潟の港、新潟港をほめるぢやないが、雨の降る夜も風の吹く夜も、出船千艘入船千艘、一つ日相山人花咲かす、沖をながめて遊山をなさる、二つは俄かにチヨロ(小舟)をおろし、三つ港へ入船なさる、四つ四綱碇をどめて、五つ入船、酒數さんと貰つた、六つ睦ましく友船よんで、七つ馴染の女郎衆あげて、八つ矢鱈に太鼓や三味で、九つ小宿を賑やかにする、十に問屋は御繁昌で暮しますがヤンレー(浦野左右太記)

アリヤサ、あの子にこの子、團子に黄粉、よつても付かない
 アリヤサ、アリヤサにスツトサ、スツトサの化物、晩に出で化やかせ
 ヨイ、竹の切口しこたんたんと、浪々たつぷり溜りし水は、清ます濁らす出す引かす
 ヨイ、ヨイヤサ、茄子焼めが、嫁に行くどて箆笥、長持、鏡台、針箱、春慶塗の便器まで買ふて貰うて、臍が出臍でヤレ嫌はれた
 ヨイ、娘十六、七や嫁入盛り、箆笥、長持、重箱、手箱、これ程持して遣るからにや、必らず戻るな

よ、お母さん、そりや無理だ、西が曇れば雨となり、東が曇れば風となる、千石積んだる船でさへ、嵐變れば出て戻るか、橋の欄干に片足突つけて、青涕くつ垂らして、傾けた突つ外して、涎垂らして川下見れば、オワラ河原柳の影許り、アリヤサ、
 (盆唄のダシは、今は「ホワイ」と云ふ實に品がない)
 樽叩きの拍子は
 トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ、トントンカラ
 (樽叩きを、新潟特有のもの、如く思ふは誤りにて、長岡より來れるもの、古き本に記しあり、尙ほ樽叩きを「樽砧」と云ふは、紅葉山人が俳句の題にせしよりなり)(浦野左右太)



砂走りに興ずるピクトラ・ドーゼント



(七) H 號 一 百 三 千 二 百 二 號

(可 器 物 展 覽 三 期)

四 四 第 一 千

峰に防共合唱

僕はこんな大きな太
 ことがない
 彼等の事直な御来迎
 頂上では天地一
 感嘆の聲を放ちお
 をのぞきつ、海開
 慶賀前で整列し、
 中で日露国歌が囀
 て合唱された、ドイ
 ちに唯一人、静かな
 明で笑った者があつ
 歌謡運動を完全で完
 能通り通して、彼等
 のだった、ドイツ

の責任感に感服の富士山頂
 とでなく、視察された
 かくて午前七時半下山開始
 一同は砂走りの快味を十分
 に満喫、殊に若い元氣者共は
 物凄いスピードで一瀧千里を
 駆け下り下山の第一着はハッ
 カー君に歸した
 十一時半一同は麓の太郎坊で御
 禮の賣野學校男女生徒に迎へ
 られ、食後山中のキャンプ場を
 隔つて、其處は頂上で「ハンザイ」
 「山中湖畔にて竹田特派員電誌」
 「且キャンプに誘はれた一行は
 夕刻キャンプを引上げてニュー
 グランドホテルに到着、金剛杖
 と首笠は故國への何よりのお土
 産として大切に藏はれた、以下
 は彼等が最も期待してゐた富士
 山に發した印象の二三、三
 團長のシュルツエ氏は一行の
 最年長者だが登りで遅れたの
 は年のせゐるだと思はれてゐた
 ところ、山を降りてから氏の
 靴が兩足共左足のものだった
 ことが判つた、登山靴は大急
 ぎで作つて漸く山中へ東京か
 ら届けられた有難かつたがそ
 の中に他にも兩足共左の靴が
 ありそれに當つた不運な青年
 は團長に登山休止を勧められ
 涙を吞んで断念した程だつ
 た、ところがシュルツエ氏の
 靴も兩方共左足だつたのだ、
 責任ある團長として右足にも
 左足の靴を穿いて登山を完了
 したことが後で判つたわけだ
 富士登山は決して樂ではない、
 まして一ヶ月余の航海に次いで
 渡日以來休養もない、彼等が疲
 れるのは寧ろ當然だが
 然し麓の太郎坊へ下りた時も
 う一度あの頂上まで登るか
 と問へば言下に直剣に登らうと
 答へる、頂上等で曇かぬ顔を
 してゐる者に使れたかときく
 と一人として使れたといふ者
 はなかつた、太陽の光線が強
 いので頭が痛い、決して弱音
 を吐かないのだった

